

【研修参加学生の報告書から】海外研修・実用英語（海外研修）

<フィリピン・8月研修>

・日本とは違い人々はとてもフレンドリーで、フィリピンに慣れていない私たちにとっても親切に接して下さってとても助けられた。特に私のチューターは、2週間ほどのフィリピンでの研修を私たちにとってより良いものにできるよう沢山サポートして下さったり、気遣って下さったりして本当に感謝している。さらに、農業も水産業ももっと技術の向上を図ることが課題だが、そこで日本のやり方を押しつけてもその国に合うかどうかはわからないし、文化の違いも関係してくるので、先進国が途上国の技術の向上を図るとするのはとても難しい問題だということが分かった。この研修に参加していなかったら、おそらく一生体験することのできなかったことがほとんどだったと思うので、この研修に参加して本当に良かったと思う。また、フィリピンなどの海外では、SNSはFacebookが主流だということで多くの人とFacebookでつながることができて、初めて海外の人とSNSでつながったので、もう一度ぜひフィリピンに会いに行きたいと思った。（農・2年）

・現地の人のお勧めを聞くとフィリピンについて深く知ることができた気がする。と同時に、どのような考えを持っていてどんなものを好むのかが分かった。私は日本について知らなすぎる。いつ誰に日本について聞かれたとしても、文化やお勧めについても自分の意見を持って語ることが出来たら良いと感じた。また普段の生活で使うジブニー^{*1}について、実際に乗ってみるととても利用しやすい。ジブニーの乗車賃を乗客間で回して運転席まで渡してもらおうというのもフィリピンならではのコミュニケーションという感じが伝わり、乗客間で顔なじみになったかのような錯覚を覚えた。産業面では、現地で“wet market”と呼ばれる市場で問題を解決していくことには、先進国のやり方を押し付けるのではなくその国にあった方法を見つけ、何が大切で必要なかを考えることが重要であると今回学んだ。今回の研修全体を通して滞在したからこそ感じ取れることがあり、現地の課題や良い点について多くの学びがあった。一方で、日本には感じない日本の良さも感じることも出来た。（農・2年）

^{*1}ジブニー…フィリピンの乗合バス

・研修の前と研修後の自分の言語力、異文化クロス、グローバル問題などについての理解度が改善できた。語学、コミュニケーション能力では、今の時点で今回一番得ることが出来たのは英語を話す自信を持ち、英語を勉強するモチベーションを高められた。その上、今後の英語学習計画を再設定することができた。去年初めてベトナムから日本に来て、発展途上国と先進国との違いなどを理解することができたが、今回の研修では現地でチューター、先生と交流しただけではなく、学生や観光地の人などに話す機会を作り、異文化で色々な面白いことが発見できた。発展途上国の産業にはやはり色々な問題が存在しているが、先進国の同じ政策やテクノロジーなどを何でも応用できるわけではないと認識できた。フィリピンの市場では日本製やベトナム製など色々な国からの商品があり、輸入が活発だとわかった。（農・2年）

・フィリピンやアジア諸国の農業は繁栄しているが、多くの場合ハイテク機械をあまり使用せずに小さな面積の土地に植えられているため、農産物の生産性は最大レベルに達しない。そして、化学肥料を使用し、一部の作物の品質も低下する。漁業も高度に発達しており、彼らが使用する漁具は創造的で非常に効果的だ。しかし、無差別の漁業状況と漁業管理の難しさが海と川の資源を危険にさらしている。フィリピンなどの発展途上国における農業表現型計画は、政府および関連機関の経済的支援に大きく依存している。新鮮な農産物、無農薬、食品防腐剤の問題がますます懸念されており、これは将来成長する潜在的な市場である。フィリピンやアジア諸国など、農業生産が盛んな国はこれに注意する必要がある。漁業に関しては漁師自身が水産資源の保護の重要性を認識していない場合、水産資源の管理は非常に困難だ。したがって最も重要なことはこの問題について漁師の意識を高めることだと考えられる。（農・2年）

・研修ではフィリピン大学に通い、レクチャーを受けた他、町の人たちとの交流を通して語学力の上達を図った。研修中の学習を通してスムーズにコミュニケーションをとれたと感じる場面が徐々に増えてきた。研修中は英語で日記をつけ、その内容からチューターとの会話を膨らませたが、これも語学力の向上に大きく繋がった。見学では日常会話に使う英単語だけでなく、農業や水産業に関する専門的な英単語も現地の方々からの説明から学習することができた。そのうえ、フィリピンの水産業、農業について理解を深めるとともに、途上国のこれらの産業の現状や課題、参考になる点への理解も今回の研修の大きな目的であった。見学から見てきた現状は、途上国といっても比較的しっかりとした養殖や研究の設備が整っていることだ。数年前まではここまでの設備は整っていなかったのかもしれないが、年々この国の技術が進歩していることを感じた。研修前は自分が海外を就職の地に選択することなど全く考えていなかった。しかし、JICA事務所を訪問したことや

引率して下さった石崎先生を見て、海外で働くことも素晴らしいと学ぶことができた。

(水産・2年)

・語学について、渡航前にフィリピンの産業や地名に関する単語を学び、実用英語の授業ではコミュニケーションの取り方を練習した。日本での英語の授業では世界の出来事を読んで理解するというものが中心だったが、研修では会話の相手から得たい情報を聞き、自らの考えを伝える方法を探るといったものが多かった。そのため、フィリピンに対する理解が深まるとともに人との円滑な会話をする経験を積むことができた。語学研修中にフィリピンの農業、漁業について説明を受けたが、抱えている問題は日本と似ているものが多かった。改めて産業の問題はその現状と時代に合わせた消費者を始めとする人々の動向とのバランスをとることが重要だと感じた。また、日本ではあまり見たり食べたりしない魚種を養殖し、流通させていくのは現地ではできないことだと感じた。それに付随する飼料や用水管理の技術向上、環境の改善、生体の研究の様子を目にすることで、地域と求められている技術とが密接に関わっていると理解したためである。

(水産・2年)

・今回の語学研修では、実際に英語を話す事が大変多く、先生やチューターの方々とのほぼ毎日のコミュニケーション、英語にあふれた日々の生活によって、スピーキング能力が向上し、苦手意識や英語を話す事への恐怖がなくなった。フィリピンのイロイロの市場を訪れた際、魚がどのようにして売られているのかを見てきたが、衛生面で少々問題ありだと感じた。発展途上国、また、熱帯地方の国のため、氷の確保が難しいとは思いますが、内臓を取り除くなど、何かしら処理をした方が良かったと感じた。また、日本であれば資源管理のために漁獲はしないであろう稚魚や幼魚が売られていたことも改善すべきであると思う。街に出ると、何度か物乞いの子供たちや執拗に何かを売ろうとしてくる子供の集団に遭遇した。実際に彼らのような人々を日本で見ることはなかったの、そういった場合の対処の仕方も、知らないといけない状況に陥ってしまうということを、身をもって思い知ることができた。今回の研修を通して、もともと考えていた、「海外で水産関係に仕事をする」というビジョンがより鮮明になったと感じている。

(水産・2年)

・フィリピンで日常的に英語を使い、聴くことが必要になった。私はできるだけ自由時間に現地の人と一対一で対話をするようにした。話を聴くことに関しては初日より相手の話を理解できるようになった。日本に帰ってから、いつも見ている海外ドラマを字幕なしで理解できたのでリスニング能力が向上したと感じた。また日本に帰国してからもUPV(フィリピン大学ヴィサヤ校)での授業で教えていただいた先生とSNSで連絡を取っている。パブリックマーケットでは、日本とは異なった売り方を見ることで、日本での食品の売り方について様々な考え方をすることができるようになった。日本では常識的なことが国によってはそうではないということを実感し、自分とは異なる考えをこれまで以上に受け入れることができるようになった。

(水産・2年)

・まず語学の面で、自身をグローバル化するにあたり実用的な英語力の必要性について学ぶことができた。食文化において最も強く感じたのは食の選択性がとても多様であることである。地元のレストランに入ればシシグライスやミルクフィッシュといったフィリピン料理が提供され、SM CITY シティやその周辺には多くの外食産業が outlet して様々なジャンルのファストフードを食べることが出来る。グローバル化により様々なジャンルのものがフィリピンに参入して多様性を生み出しているのだと思った。その反面、ジョリバーなど地元のファストフードショップがあるなどその土地ならではの物の強さも感じた。あれだけ多様な食事産業の中で生き残りトップに立つということから、グローバル化が進む現代においても地域性というものはとても重要なものであり、その国を考えるにあたって最も重要視すべき項目なのだと思ふことができた。そして、物価や平均年収そして実体験からフィリピンの貧富の差について学ぶことが出来た。このことにより世界での貧富の差や子供の貧困についての片鱗を学べたと感じた。

(水産・2年)

・自分の英語が予想以上に通じ、そのことでコミュニケーションをとることの楽しさや自信を得ることができた。文化、生活理解について、「郷に入っては郷に従え」という言葉があるように、現地のやり方に従うことが海外で上手に過ごすコツだと実感した。一度食あたりを経験し、何度も嘔吐し、熱も出てかなり苦しい思いをした。食い合わせが悪い食べ物を事前活動で調べていなかったことが原因なのだが、何か海外でものを食べる時は、必ずその食べ物についての特徴を調べなおす必要があることを実感した。海外で安全に活動するためには、自分の直感を信じるのではなく知識ある人に聞くのが最も安全であること、そして自分の体に変化が起きたときにまずは先生に報告することの重要性を理解できた。ツアーでは事前から訪問する施設についての基本情報を調べること、質問について考えることは、国際的な観点から物事を考える以前におさえておかなければならない内容である。基盤が固まらないまま説明を受けたので考えをまとめることができなかった。今回の研修で一番感じたのは文化の違いを理解するというこの本質は異文化を異文化だと理解する

ことであり、海外支援などで自国の価値観を押し付けてはならないということである。(水産・2年)

<インドネシア研修>

・今回の研修で得たものはインドネシアにおける農業の知識や英語でのコミュニケーション能力は勿論、他にも異文化を理解する力や異国で、自分で考えて行動する力である。コーヒーやカカオについては今まで本物を見たことがなかったため、見たときにはとても感動した。今回、コーヒーについてはコーヒーの実から自分たちの知るコーヒー豆になるまでの様子を見ることができ、大変貴重な経験であった。ボゴール大学でも講義形式でインドネシアの農業について学ぶことができた。有機農業やラン等の花の生産、さらにはバナナやマンゴーなどの熱帯の果物の栽培についてなど、インドネシアならではの農業を学ぶことができた。インドネシアではほとんどの人がイスラム教を信仰しているため、今回はイスラム教の文化を学ぶことができた。毎回お祈りの時間になると街ではお経のような音楽が流れ、人々は次々にお祈りをする部屋に向かう。私には馴染みのない習慣で異文化を強く感じた。異なる文化を知るには実際に現地に行き、自分の目で確かめることが大切だと感じた。また違う文化に寛容になることも大切であると感じた。今回は人々と交流するという点で積極的に行動した。自由な時間にはボゴール大学の生徒に自ら話しかけて一緒にバスケットボールをしたり、現地の言葉を教えてもらったりして交流を深めた。このようにして友達が増えたことは大変うれしいことであり、SNSによって現在も交流を続けている。自ら積極的に行動し、違うというのに寛容になることで様々なグローバルな視点や力を身につけられたと考える。(農・2年)

・国際会議「植物栽培の持続的発展」への参加を通して、専門家からインドネシアについて多くのことを学んだ。実際のプランテーションやお茶工場、コーヒー工場や田舎も都市の方へも行ったので、本当の民族生活や生産現場をより理解することができた。マレーシア人がルームメイトなので、マレーシアの文化の話もよく聞いた。英語の能力も上達したと思う。最終発表に向けて、皆一緒に頑張り、当日はパティックというインドネシアの伝統的服装を着て発表したのも、良い記念になった。(農・2年)

・国際会議では、発表から質問まですべてが英語で行われ、最初はインドネシア人の教授が話す英語を聞き取ることが出来ずに苦労した。しかし、少しずつ英語を話すことに対する意識が自分の中でシフトしてきている。現地の学生と一緒に授業を受講して気づいた日本と異なる点は、生徒の発言量である。日本で自分が受けてきた講義を振り返ると、あまり自分から発言する機会がなかったように思える。しかし、インドネシアの大学では授業の途中でも生徒が発言することが多かった。自分も一つ一つの講義を大切に、知識を得るためにハングリー精神をもって受講することを心掛けた。今回の海外研修を通して、コミュニケーションには、間違いを恐れずに相手に伝えようと努力することが大切だと言うこと、ハングリー精神を持ち挑戦すること、自分の中の普通は海外では普通ではなくなることを学んだ。(農・2年)

・熱帯地域での農業について学べるだけでなく、様々な国のメンバーとのコミュニケーションや意見交換が出来るとても良い場だったと改めて感じる。今回私が最も学べたと思う事は、グローバルな場で交流する際、意見を交換する際の積極性や現地に赴いてみる事の大切さである。日本人は、よく自分の意見を主張するのを遠慮したり、質問したりするのを躊躇する傾向にあると言われていた。しかし、グローバルの場では真逆で、質問をしないほうが失礼で、皆が主体的に聞いているのがよく分かった。それは、学びの場や意見交換の場でのみならず、出会った人、現地の人々との交流の中でも言える事だ。出会った人々に積極的に話しかけたりすることで、相手も興味を持ってくれるので、会話が弾み、仲良くなることが出来ると思う。英語以外にも、自分でインドネシア語を少し勉強していたので、現地の人々により興味を持ってもらえたとし、語学を学ぶ上でとても良い実践の場になった。インドネシアと言えば、日本人にとって人気の観光リゾート地として馴染みのあるバリがあったり、一方で、日本のメディアでも度々報道されるイスラム教の厳しさであったりというように、様々なイメージがある国だと思う。しかし、それは、メディアなどによって作られたイメージである場合も多いという事をよく考えないといけないと改めて思い知らされた。私はこの研修で、グローバルな視点で社会を、そして世界を見ていく上で重要なことを学ぶことができたと思う。(水産・2年)

<フィリピン・9月研修>

・このプログラムを通して得られた成果として最も大きいものは英語能力の上昇だ。特に英語でのコミュニケーション能力は実際に英語を使う場面がとても多く、授業だけでなく日常的に英語を話すことで、より上達を感じられた。また、実際に現地の人と会話することで自分の英語が現状どの程度通用するのかを実感できた。次に、フィリピンの発展の歴史や産業の現状について知ることができ、その他マーケットなどの現地の生活に密接に関わる場所を見て、実際の人々の生活につ

いて深く知ることが出来た。また、研修以外にも自由な時間を利用して個人的に様々な場所を訪れることで自分の趣味を通して現地の人とつながりを持つことができ、自分の力で現地の人との交流を行う貴重な体験ができた。(農・2年)

・今回の海外研修で大きく分けて二つの成果が挙げられた。一つ目は語学・コミュニケーション能力の向上および意識の変化である。日本での英語学習とはかなり異なる内容・学習方法で、特に「生徒主体の学び」が多かった。二つ目は海外の異文化理解である。研修の初めは日本との違いにかなり戸惑うことが多かったが、発展途上国の首都ではない中規模都市の様子に生で触れることができ、本当に良かったと思う。現地のファストフードから少し良いお店、異臭のするマーケットや排気ガスだらけの道、野良犬やストリートチルドレンのいるような通りなど、現地に行って実際に体験しないと分からない事だらけの毎日だった。(農・2年)

・今回の海外研修は、私にとって最も長期の海外研修であり、改めて日本との違いを理解することができたし、様々な刺激を受けることができた。フィリピンの人たちは、英語だけでなく、もともとの言語であるタガログ語などすべてを流暢に使い分けていて、子供でも私たちよりうまく英語を話すことができていた。フィリピンに行って一番感じたのは、テロがより身近なものとなっているということだ。日本がどれだけ安全か改めて感じた。農業については、昔ながらの手作業や水牛を使って行う農業がまだまだ多く、効率面では良いとは言えないが、それでも一次産業の就職者が多いフィリピンでは、ある程度の生産力が確保できているのだと感じた。フィリピンでも接客態度やトイレ事情など日本との違いに驚くことが多かったが、それを不満に思わず受け入れることで、不自由なく暮らすことができ、海外での過ごし方について学ぶことができた。(農・2年)

・英語を話せなくて、「ここで三週間生きることができるのか」と不安が募ってきた。しかし、日が経つにつれて不安がなくなった。毎日の朝の授業が充実していたからである。日本ではWritingの授業を基本としているのに対して、フィリピンではSpeakingの授業を基本としていた。日々の努力と先生の熱心な指導のおかげで英語力を上げることができた。また、当初私は英語にあまり興味がなかったが、英語を話したいという気持ちになった。フィリピンへ行ったからこそコースの皆さんと仲良くなって、フィリピンの友達もできて、今後も彼らと一緒に英語を話したり、勉強したりできるのは私の今回の研修の宝物である。(農・2年)

・研修を通して、自国にはない様々な文化、環境、そして問題を学んだ。特に、文化と環境の点では日本よりも異なっていた。フィリピンではキリスト教という宗教を文化の基準にしており、日常生活においてもこの宗教とともに成り立っていた。食文化には、米が中心の料理が多く提供されていた。交通状況では、移動の手段としてジプニーという乗合自動車があった。乗降の際は現地の言語で話す必要があり、このことから英語以外の言語をわずかながら習得した。環境では植民地支配下の歴史を持ち、特にスペインとアメリカの支配下においてはこれらの文化を十分に受けていた。格差について、滞在先のイロイロ市の中心から郊外に行くとスラム街のような雰囲気のある街並みを見かけた。衛生環境の悪いような家々がいくつも点在していた。このことは、マニラにおいても同じことが言えた。都市部の郊外にはまさしくスラム街といえるほどに古びた家々が立っていた。農業においては食料自給に苦しんでいた。その対策として、近隣諸国との貿易では米を輸入増加にするといったことが挙げられていた。水産業においては商業用漁業の問題が山積していた。これらは日本ではあまり見られないことなので私にとっても重要な体験となった。(水産・3年)

・このプログラムでは自分の考えを発信する機会がたくさんあり、その分アドバイスもたくさんいただくことができた。授業のある日は一日中先生とチューターだけに留まらず、一緒にプログラムに参加した鹿大生やフィリピン大学の学生と英語で交流した。英語を話すことに慣れることができ、自分の成長を感じることができた。プログラム最終日にチューターから「あなたは英語話すの上手だよ」と言ってもらえたのは特に嬉しかった。ただ英語を学ぶだけでなく、フィリピンの文化にも触れることができ、とてもよい機会となった。私は特に食べることが大好きなので、食に関してフィリピンと日本の相違点をたくさん見つけることができた。(水産・3年)

・日本で勉強するよりも英語を使う機会が格段に多いので、英語を話すということに慣れることができた。シティツアーでは、イロイロ市の有名な建物の見学や伝統服の試着、フィリピン料理を堪能し、フィリピン文化を学び楽しむことができた。2週間のフィリピン生活の中で何度も迷子になり、何度もどのジープに乗ればいいのか分からなくなり、何度も間違ったジープに乗るたびにフィリピンの人々に助けられた。また、スペイン語や所属する研究室、興味のある分野の勉強への意欲も高まった。初めての海外であるフィリピンはとても刺激的で、日本ではしたことの多い経験ができた。これからも海外で様々な経験をし、自分の成長につなげていきたい。(水産・2年)

・JICA 訪問や養殖場見学、市場見学など研修のすべてを通して、フィリピンの文化、社会状況について一部理解することができた。路上で花を売る少女やお金をせがむ家族、それに対してショッピングモールで豪華に買い物をしている家族。少し町を歩くだけで貧富の差を身をもって感じる事が出来た。自分が専門として学ぶ農水産学という方向から、フィリピンを含む途上国に貢献できることが数多くあることを知った。私たちが深刻な問題だと考え、援助しようとしていることは、本当に必要なことなのか、そもそもそれは現地の人々にとって深刻な問題なのか、など多くのことを考える機会になった。活動が援助側の自己満足で終わらないためにも、日本目線ではなく、現地目線での農水産業における問題点とその原因を明確に理解し、さらにその国の文化や社会状況を学ぶことが国際協力において重要であることを学んだ。(水産・2年)

・今回の語学研修では自身の語学能力の向上はまずまずだが、多くのものを得ることができた。1つは、これまでの私の英語の学習方法は間違っていなかったということである。ただし、現在の英語の勉強に加え、もう少し勇気を持つことが必要であると実感した。私は、現地では自分のスマートフォンをほぼ使わず、目的地への行き方やその他の自分の欲しい情報は現地の人に尋ねた。声を掛けた人は皆丁寧に教えて下さり、困ったときには何度も助けられた。しかし、一方で信用しすぎないことを心掛けた。より長く滞在して多くのものを見れば見るほどそれは明らかになるのではないかと思った。他にも、日本のように貧富の差が大きいことを実感した。この研修を通じて、語学の面においても、海外で生活するという点においても、様々なことを学んだ。自身の英語学習に対するモチベーションをより上げることができ、様々な物事に対する視野も広げることができたのではないかと思う。(水産・2年)

・フィリピンでの生活は日本と異なることが多く、文化の違いを感じる事ができた。貧富の差があり、スーパーマーケットで買い物をする人と市場で買い物をする人では服装や身だしなみに違いがあった。フィリピン経済はますますの発展が予想でき、さらなる貧富の差が生まれる可能性もあるので、国外の発展にもそのようなことに注意を払う必要があるのではないかと考えた。海外においては日本での生活と切り替えが必要であり、外での発言や行動も意識しなければならないことだと気付かされた。将来的には、海外での仕事というのも考えられるので、文化や風習、その地域での治安等は事前に把握すべき大切なことであると改めて分かった。SNS等を用いてチューターと交流することができ、大切なコミュニティができた。英語で文章を書く機会がなかなか無いので、連絡を取り合うことで、モチベーションにもつながる良いものであると思った。(水産・2年)

・語学研修中にフィリピン大学の学生と交流する機会があったが、自分のことよりも私を助けることを優先して下さった。私が外国人だから優しくしたのかもしれないが、それでも他人に優しくできるのは親切である上にフレンドリーであるからだと思う。東京オリンピックを控えている日本に必要なのは、語学力や多くのボランティアではなく、助けられるかはわからなくてもどうにか助けようという気持ち(=フレンドリーさ)だと考える。また、市場の様子は日本の市場の様子とは異なっていた。各商店が並んでいるというよりは、共同利用できる場所があってそこに入居しているように思えた。現代の日本が失いかけている、地域で一つのことを成すという文化が今でも根付いているのがフィリピンなのだと思う。目に見えない考え方の違いがあるから、目に見える制度や決まりが違うのに、それを無視した援助や協力は無意味だということの意味が分かった。(水産・2年)

・現地では大学に通い、語学研修プログラムに参加した。毎回テーマに沿った内容で、先生やチューターの方たちに楽しく、多くのことを教えてもらうことが出来た。このプログラムのおかげで語彙力も増え、英語での会話の仕方や場面に応じた表現力も向上したと思う。授業の中では英語で発表する活動や大学内の敷地をまわって実際にそこにいる学生とコミュニケーションを取る活動もあり、様々な活動の中で語学力を伸ばすことが出来た。現地での基本的な交通手段となるジープの乗り方を教えてもらい、実際にそれに乗って、イロイロの店や博物館、教会、伝統的なものを見て回った。特に水産学部生として、なかなか見る機会のない海外での養殖現場を見ることが出来たことは良かったと思う。大学では農学・水産に関する講義も受けた。鹿児島で自分たちが学んでいる内容に関して、フィリピンではどのような状況なのかを知ることが出来て興味深かった。大学外の活動や自主活動でも色々なことを学んだ。今回の研修で3カ所のマーケットを訪れたが、それぞれによって様子が異なり、清潔さや道の感じ売り場の感じなども違って、その違いごとにそのマーケットらしさが出ているような感じがした。(水産・2年)

▼8 月研修



▼9 月研修

